

23. 高齢歯周炎患者における抗歯周病原細菌抗体の測定 —新潟市高齢者における歯周組織状態と血清IgG量の関連—

○小林 孝雄, 中島 啓介, 富岡 純,
森 真理, 加藤 幸紀, 小鷲 悠典
(北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座)

【目的】血清総IgG量あるいは血清IgGサブクラス量と歯周炎の病態との関連については、これまで多くの研究者により報告されている。本研究では、日本人において血清IgG抗体量と歯周炎の病態との間に何らかの関連があるかどうかを明らかにするために、高齢者の血清総IgG量および血清IgGサブクラス量を測定し歯周組織の状態と比較した。

【材料および方法】1. 被験者 新潟市に住民票を有する71歳の高齢者に調査依頼を送付し、その中から414名を選定し被験者とした。診査項目として、①ポケット深さ、②アタッチメントロス、③歯石の有無、④プロービング時出血(BOP)の有無、を診査した。また、各被験者から静脈血を採取し血清を分離後、測定まで -80°C で保存した。

2. 総IgG量の測定 株式会社BMLに依頼し、免疫比濁法にて血清総IgG量を測定した。

3. IgGサブクラス量の測定 マウス抗ヒトIgGサブク

ラス抗体(Calbiochem社製)をコーティングしたNunc社製イムノプレートII上で被検血清を反応させ、連続希釈したヒト標準血清の吸光度をプロットした標準曲線から各被検血清のIgGサブクラス量を算出した。

【結果および考察】診査項目と測定した血清IgG量の関連について統計処理を行った。その結果、危険率5%未満で有意であったのは、総IgG量とポケット4mm以上の部位の割合($r=0.12, P<0.01$)、および総IgG量とBOP(+)の部位の割合($r=0.12, P<0.05$)であった。また、分散分析において危険率5%未満で有意であったのは、総IgG量とポケット4mm以上の部位の割合($P<0.05$)、および総IgG量とBOP(+)の部位の割合($P<0.05$)であった。以上の結果より、血清総IgG量が高いほど、ポケットが深くプロービング時に出血しやすい傾向が認められた。しかし、IgGサブクラス量と診査項目との間には有意な関連が認められなかった。

24. センターにおける摂食・嚥下機能障害患者への取り組み

○関口 五郎
(東京都立心身障害者口腔保健センター)

【目的】東京都立心身障害者口腔保健センターは昭和59年の開設以来、何らかの障害を伴った者(以下、障害者と略す)を対象に、二次歯科医療機関として歯科診療、予防相談・指導ばかりでなく、歯科保健医療従事者の養成、ならびに研修の機関としてもさまざまな取り組みを進めてきた。現在、一年間にのべ10,000名以上の障害者が患者として来所される中で、摂食や嚥下の機能に問題のある場合も少なくない。そこで当センターでは昭和62年より摂食外来を設けてこのような患者の対応に取り組んできた。そして平成11年4月からは摂食予診を開始し、またビデオX線透視(Videofluorography;VF,嚥下造影)検査装置を導入したことを踏まえ、同年7月からはVF予診を開始した。さらに摂食・嚥下をテーマとした研修会を開催するなど、研修活動も行ってきており、これまでさまざまな職種の方々が受講された。本発表ではこれま

でのセンターにおける摂食・嚥下機能障害患者への取り組みを総括することを目的とした。

【方法】センターにおける摂食・嚥下障害患者へのこれまでの対応状況をまとめ、あわせて摂食外来を受診した患者について疾患・障害別、および年齢別に分析を行った。

【結果および考察】当センターでは、これまで摂食・嚥下機能障害患者へさまざまな取り組みを進めてきており、摂食外来には一年間にのべ500名以上の患者が来所される。摂食外来を受診した患者の疾患・障害別では脳性麻痺、知的障害、ダウン症が多く、年齢別では発達期の患者が中心であった。しかし近年では脳血管障害患者など高齢者の受診も増加傾向にあり、また受診される患者の疾患・障害もその範囲が広がるなど、今後ますます摂食・嚥下機能療法に対する必要性が広がってゆくと思

われた。さらにビデオX線透視検査装置の導入も、特に嚥下機能に問題のある患者に対して、有効な診断要素のひとつとなることが期待されている。このように当センターでは、紹介型医療機関として、一般的な歯科疾患だ

けでなく摂食などの問題を主訴とする患者の紹介による受け入れを進めている。そしてこのような取り組みを通じて、患者のADLの獲得と患者や保護者、介護者のQOLの向上を目指している。

25. 訪問歯科診療における義歯補綴治療時の血圧変動に関する一考察

○森 康仙, 関井 紀晃*, 平井 敏博,
越野 寿*, 石島 勉, 高田 英俊

(北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座・

*北海道医療大学歯学部附属病院地域支援診療部訪問歯科診療班)

【目的】一般に、義歯補綴治療の循環動態へ及ぼす影響は少なく、高齢者の歯科治療の中では比較的安全であるとされてきた。しかし、われわれ研究結果から、義歯使用中の疼痛を訴えている患者の義歯調整においては、安静時に比べて有意な収縮時期血圧の上昇とRPPの増加を確認した。その原因として、術者に対して疼痛部位を明示しようとして、義歯調整過程の初期から、患者は疼痛を我慢しながら大きな咬合力を発揮することが推測された。この問題を解決するための一つの方法として、患者に対して義歯調整の進め方を説明し、調整過程初期からの過大な咬合力発揮が不必要であることを理解させ、調整を行うことに努めている。

今回は、上記の試みの効果を確認することを目的として、義歯調整時の脈拍数、収縮期血圧、拡張期血圧を松下電工製一体型手くび血圧計(FUZZYEW284)を用いて計測し、その結果からRPPを算出した。

【方法】調査対象者は平成12年4月から11月の8ヶ月間に訪問歯科診療を実施した34名の患者中、義歯調整を行った患者から無作為に抽出した15名(平均年齢:72.37

歳)で、延べ測定回数は54回であった。

全身疾患の内訳は、脳血管系40.7%、循環器系33.3%、骨・関節系18.5%、その他7.4%であり、循環動態の変動によって増悪化が引き起こされ易い脳血管系疾患と循環器系疾患が基礎疾患の74.0%を占めていた。

【結果および考察】脈拍、収縮期血圧、RPPの変動においては、平成11年度の結果では、義歯使用中の疼痛を訴えている場合に増加傾向が観察されたが、12年度は、処置前、処置中、処置後、いずれも安定した数値を記録していた。

拡張期血圧の変動においては、平成11年度、平成12年度ともに処置前、処置中、処置後の顕著な変化は観察されなかった。

以上の結果から、義歯使用中の疼痛を訴えている場合に観察された収縮期血圧およびRPPの有意な上昇の原因は疼痛であり、この上昇は、患者に義歯調整の進め方を十分に理解させ、不必要な疼痛を惹き起させないことによって回避できることが明らかとなった。

26. 本学地域支援診療部の訪問歯科診療における一考察

○関井 紀晃, 越野 寿, 平井 敏博*,
高田 英俊*, 石島 勉*, 川上 智史,
坂口 邦彦, 大友まどか

(北海道医療大学歯学部附属病院地域支援診療部訪問歯科診療班・

*北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座)

【目的】本学は、平成7年より訪問歯科診療を開始しているが、年々患者数が増加しており、平成12年4月より本学では専任の歯科医師、歯科衛生士の各1名を配置し地域支援診療部訪問診療班として組織の充実を図ってい

る。そこで、要介護高齢者の様々なニーズに応えられるよう現在の訪問診療についての評価及び意義を検討した。

【方法】平成12年4月から11月にかけて訪問診療班が担